

ジャック・ロンドン作「極北の森」*

大 矢 健 記

低木林が絶えて、矮林も姿を消した。各齋の極北が大地に大地たることを許さぬ荒涼地帯、バーレンの中心へと歩を進めると、驚いたことに大きな森と微笑を浮かべる土地が広がっていた。しかしこの事実には、世界はようやく気づき始めたところである。世界を旅する者の中にはすでにこれを知る者もあったのだが、その事実を告げるため、彼らが戻ってくることはなかった。

荒涼地帯。そう、ここは荒涼地帯なのであり、北極の荒地、北極圏限界線内の砂漠、吹きさらしで凍てつく、ニオイ牛と瘦せたプレーンズ狼の住処だ。エイヴェリー・ヴァン・ブラントはそう考えていた。木も生えず笑もなく、生えているのは、苔類か藻類のたぐい。まったく人を寄せつけない大地だ。少なくとも地図上の白い空白地帯へと突き進むまで、そこをブラントはそんな土地なのだろうと思っていた。想像もしていなかった豊かなスプリューズの森と、記録の残されたこともないエスキモーの部族に出くわすまでは。これら地図上の空白へと分け入り、地図に山脈、盆地、低地、あるいはくねくね流れる河川のマークを入れること、これが彼の狙いであり名声獲得の方法だった。もしかしたら森が帯をなし原住民の村があるかも知れないと夢想するのも、ちょっとした喜びではあったのだけれど。

エイヴェリー・ヴァン・ブラント、より正式には地質調査隊の A・ヴァン・ブラント教授と呼ばれるべきこの男は、調査隊全体の中では副隊長であ

*本作には、明らかな人種的・性差別的な差別の意識・言葉遣いがある。歴史的意義などを考慮し、そのまま訳出している。

り、セロン河の支流を約五百マイル上流へと進み、今、記録にない村の一つへと入っていかうとしている分遣隊においては、その長であった。ブランドの後ろでは、八人の男たちが重い足を引きずっていた。そのうち二人はフランス系カナダ人の荷運び人^{フ・ヤージュール}夫で、残りはマニトバ州出身の北米インディアン・クリー族のがっしりした男たちである。ブランドだけが純血のアングロ・サクソン族の人間で、彼の血はその血管の中でサクソン族の伝統に応えるかのように激しく脈打っていた。ロバート・クライヴ^(脚注1)、フランシス・ヘイスティングズ^(脚注2)、フランシス・ドレイク^(脚注3)、サー・ウォルター・ローリー^(脚注4)、ヘンギストとホルサ^(脚注5)。こんな歴史上の冒険家たちがブランドの旅の道連れであった。ブランドの種族の中では、彼がこの孤立した極北の村に入る最初の男であり、それを考えると彼は高揚感と躍動感に包まれた。そして彼の部下たちも、村の入り口でブランドの足から疲れが抜け、歩くペースが上がっていくのに気づいていた。

村人たちが出てきた。雑多な連中が彼を迎えようとやって来た。先頭の男たちは威嚇しようと弓矢と槍を揃えている。後ろにはおどおどと躊躇^{ためら}いがちな女たち、子どもたち。ブランドは右手を高々と上げて、どこにおいても誰にでも通じる友愛の印をジェスチャーする。村人たちが友好の情をもって応える。ところが、獣の皮に身を包んだ男が前に飛び出してきて手を差し出した。見慣れた「ハロー」という仕草だ。がっかりだった。髭面の男で、頬と額が日に焼けて銅のような茶色に輝くまでになっている。ヴァン・ブランドは男が自分と同じサクソン族であることに気づいていたのだ。

「お前は誰だ？」と差し出された手を握りながら、ブランドは訊いた。「アンドレか？」

「アンドレっていうのは誰のことだ？」が答えだった。

ヴァン・ブランドはじっと彼を見つめた。「ここに来てから長いんだな」

「五年」と男が答えた。瞳にはちょっとした自尊心の光がきらめいた。「とにかく、ちょっと話をしようじゃないか」

部下に目をやるブランドに答えて、「奴らには俺のところの横にキャンプさせればいい」と男が言う。「老タントラッチが面倒をみてくれる。さあ来いよ」

男は大股で歩きだし、ブランドがあとに続いた。村を抜けていった。規則性も何もなく、地面の状態に合わせて、張れるところであればどこでもヘラジカの皮でできたテントが張られていた。ブランドは慣れた仕草で眺め渡し、村人の数を計算する。

「子どもを入れず、二百人というところか」と彼は言う。

男は頷く。「かなり近い。しかし、ここが俺の住処だ。妙な言い方になるが、このど真ん中にいると、プライバシーも秘密も守れるんだ。まあ、座ってくれ。あんたの部下が料理をしてくれたら、一緒に喰うよ。紅茶の味を忘れちゃってね。紅茶の味を楽しむことも匂いを嗅ぐこともなく、五年だ……。タバコはあるかい？ ああ、ありがとう。パイプはあるかな？ いいぞ。燃え木で火をつけると……。さあ、タバコはまだあの魔術を失ってないのか……」

男は木こりのような慎重さでマッチをする。幼き炎を世界で唯一の炎であるかのように大事にする。最初の煙を肺に送り込んだ。瞑想するかのようにしばらく煙を出さない。やがて結ばれた唇のあいだから、ゆっくりと愛おしむかのように煙を吐き出した。体を後ろにそらすと表情が優しくなり、臉がぬくもりに湿った。幸福そうに、計り知れないほどの満足感で大きくため息をつき、そして唐突にこう言った。

「神よ、これはたまりません」

ブランドはすべて理解したかのように頷いた。「五年って言ったな」

「五年だ」。ふたたび男がため息をついた。「この五年について知りたいんだろう？ 好奇心が沸いて当たり前だ。じゅうぶんに奇妙な状況とは言えるからな。が、大したことはない。俺はニオイ牛を追ってエドモントンから来た。そうして、パイク(オシロイ)とその一行と同じように、厄介な目にあった。俺の場合、仲間と装備をなくしただけだがね。空腹と苦痛に耐えた唯一の生

存者ってわけさ。よくある話だよ。そうして、このタントラッチの村へたどり着いた。足を引きずり四つん這いの状態でね」

「五年」と、ブランドが考え込むように言う。頭の中で何かを転がし、ああでもないこうでもないと考えあぐねているかのように。

「このあいだの二月で五年だ。五月の初めには、グレイト・スレイヴ湖のあたりを通ったな」

「す、すると、お前は、フェアファクスなのか？」ブランドが口をはさんだ。

男が頷く。

「うーん、ジョン。ジョンだったろう？ ジョン・フェアファクスだ」

「どうして俺の名前を？」と、フェアファクスがのんびりと訊く。風のないうち、煙草の煙が弧を描いてのぼらせるのに夢中になっていた。

「当時、新聞はその話でもちきりだった。プレヴァンシュが……」

「プレヴァンシュ！」と、急に慎重になったフェアファクスが背筋を伸ばす。「スモーク山脈で行方不明になった」

「だが、奴は生き残って帰ってきたんだ」

フェアファクスは肩の力をぬいて、煙の弧づくりを再開する。「それが聞けて嬉しいな」と考え込むように言った。「プレヴァンシュ！ あの野郎がヘッドギアのことを思いついたのだとしたら、やっぱり大したものだ。大した男だよ、あいつは。で、奴は生き延びたんだね。それはよかった」

五年間。このフレーズが何度も何度もブランドの頭をよぎった。どういうわけか、エミリー・サウスウェイスのことが思い出され、彼女の顔が目の前に見えた。五年間……。野鳥の群れの低いつんざく鳴き声が頭上から響いた。鳥たちはキャンプの存在を認めると、北へ急旋回してくすぶる太陽の方へ消えていった。ヴァン・ブランドには、それらの姿を目で追うことはできなかった。腕時計を取り出す。深夜十二時を一時間過ぎていた。北の雲は血の色に染まり、濃い赤の光線が南に注いでいた。それで暗い森がぼんやりとした炎

に包まれていた。大気は呼吸なき静寂であり、針一本動かず、わずかに聞こえるキャンプからの物音が、まるでトランペットの音のように響く。クリー族の男たちも荷運び人夫たちも気配を察し、夢見る人が^{うわごと}譫言を言うように話をする。コックも思わず調理器具が音を立てないようにする。どこかで赤ん坊が泣いていた。そして、森の奥から、銀の糸のような女の声が聞こえてきた。鎮魂の歌のようだ。「オーオーオーハーハーハー。オーオーオーハーハーハー」。

ヴァン・ブラントは身震いし、忙しく手の甲をすり合わせた。

「で、奴らは、俺が行方不明のまま死んだということにしたんだな」。相手がゆっくりとした口調で訊いてきた。

「うん、君が戻らなかったからな。だから友人たちは……」

「俺のことはすぐに忘れた、と」。フェアファクスは耳障りなししゃべり方で、挑戦的に笑ってつけ加えた。

「なぜ戻らなかった？」

「その気になれなかったのが一つ。それから、どうしようもない事態になってしまったのが一つ。知り合ったとき、ここのタントラッチ酋長が足をくじっていてね。厄介な骨折の仕方だね。それを俺が直してやったのさ。俺もここにしばらくいて、体力の回復を待っていた。タントラッチにとっては俺が初めて見た白人だった。当然、俺は知恵のあるところを見せ、いろんな芸当を見せてやったよ。とりわけ効いたのが、戦の仕方を教えたことだ。お陰で、奴らは四つもの部族をやっつけて、五つの村を治めることになった。ほかの部族なんて、お前はまだ見てもいないだろうがね。そうしてここの連中は俺を偉いと思うようになり、俺が村を出ていくと言っても聞きいれてもらえなかった。実際、ものすごい歓待ぶりさ。見張りを二人つけてくれて、昼もなく夜もなく監視してくれたよ。そうして、タントラッチが取引材料を、取引材料って言っていいんだろう、差し出して、提案してきたのさ。取引でもそうでなくても、良かったのだけだね。とにかく俺はここに残ることにしたのさ」

「フライブルクで、君の弟さんとは知り合いだったんだよ。私はヴァン・ブランドという名だ」

フェアファクスは思わず手を差し出して、手を握った。「ビリーの友だちってわけかい？ かわいいビリー、あいつ、お前さんのことを何度も話してたっけ」

「しかし妙な所で会うことになったものだな」と、フェアファクスはつけ加えた。目は原始の風景を眺め、耳は女の鎮魂歌を追っている。「彼女の夫は熊の爪にやられたのさ。かなりこたえてるらしい」

「獣の生活だ」と、ヴァン・ブランドが不快そうにしかめっ面をした。「そんな生活を五年もしたら、文明の味は甘いだろうな。どう思う？」

フェアファクスは無表情だった。「分からんね。少なくとも部族の連中は正直で、自分たちの理解にしたがって生きている。おそろしく素朴なんだ。複雑さとは無関係。覚える感情に数千通りの影響の仕方がある。そんなややこしいのは、ここでは、なしだ。奴らは愛し怯え憎み、怒り幸福を感じる。ごくごく普通の間違いやのないやり方で。たしかにこれは獣の生活かもしれん、でも人生が単純で生きやすい。いちゃつきも浮気もない。女が誰かを好きになれば、すぐそう言うてくる。もし嫌いなら、そう言うてくる。お前がそうしたいなら、ひっぱたいてやればいい。しかし大事なのは、女にお前の気持ちが正確に伝わるといことなんだ。お前にも女の気持ちが正確に分かる。間違いも誤解もない。文明の悪寒のような熱病を経験したあとでは、これはそれなりに魅力的だ。分かるかな？」

「かなりいい生活だよ」。一息おいて彼は続ける。「俺には、じゅうぶんいいね。いつまでもここに居るつもりだよ」

ヴァン・ブランドは考え込むように俯いた。そして口元には、それとは分からないほどの微笑みが浮かんだ。浮気なし、いちゃつきなし、誤解なし、か。フェアファクスにも、あれがこたえているんだな、とブランドは思う。エミリー・サウスウェイスが熊の爪にやられてしまったのだから。カールト

ン・サウスウェイスという男は、それほど悪い熊でもなかったしな……。

「でも君は私と一緒に戻るんだよ」と、ゆっくりとブランドが言った。

「戻らんよ」

「いや、戻るんだ」

「言ってるだろう、ここでは人生が単純でいいんだよ」と、きっぱりとフェアファクスが答える。「俺は全部が理解できて、俺も全部、理解される。フェンスの柵を通る太陽の輝きと同じく、夏と冬が順番に入れ替わる。季節は光と影。時は流れ、人生も流れる。そして、森から呻き声が聞こえてくる。そして暗闇。耳を澄まして聴いてみろよ、あの声を！」

彼は手を掲げていた。銀の糸のような女の嘆きが深い沈黙のなか立ち上がる。フェアファクスも声を合わせる。

「オーオーオーハーハーハー。オーオーオーハーハーハー」。彼は歌っていた。「聞こえないのか？ 見えないのか？ 弔う女たちの声が？ 葬礼の歌が？ 白く束ねられた俺の髪、酋長と同じ髪。けばけばしい色彩を施された俺の肌。横にある俺の狩り用の槍。これが良い人生でないと言え？」

ヴァン・ブランドは冷たく彼を見つめた。「フェアファクス、君はどうしようもない馬鹿だよ。誰だってこんな生活を五年もすれば、やられちまうだろうけど。君は不健康で病的な状態にある。それに、カールトン・サウスウェイスは死んだんだよ」

ヴァン・ブランドはパイプに煙草をつめ火をつけた。そうしながら、こっそりと、ほとんどプロの分析力で、フェアファクスを観察していた。彼の瞳はとっさに輝き、拳^{こぶし}はきつく握りしめられ、半分立ち上がった格好で止まっていた。体から力が抜けると、考え込んでしまった。コックのマイケルが食事の準備ができたと合図してきたが、ヴァン・ブランドは少し待てと伝えた。沈黙が重くのしかかっていた。森の匂い、黴と腐食する植物の臭い、松の球果と針葉樹の樹脂的香り、キャンプの煙から漂うアロマを分析していた。二回ほどフェアファクスが顔を上げた。しかし何も言わない。そして

「それで……エミリーは……？」

「未亡人になって三年。再婚はしていない」

ふたたび長い沈黙が訪れる。とうとうフェアファクスが、無邪気な笑みを浮かべて口を開けた。「お前が正しいかもしれない、ヴァン・ブラント。一緒に戻ろう」

「そう言うだろうと思っていたよ」。ヴァン・ブラントがフェアファクスの肩に手を掛けた。「もちろん誰にも分からないが、おそらく、彼女の状態なら、結婚の申し出はあったのだろう……」

「いつ発つんだ？」と、フェアファクスが口をはさんだ。

「部下にいくらか睡眠を取らせてからだな。そういえば、部下にマイケルってのがいるんだが、あいつが怒ってた。さあ、食事にしよう」

夕食後、クリー族の連中と荷運び人夫たちが、いびきをかきながら毛布にくるまっていた。そのときもまだ二人は弱まる焚き火の横で話を続けていた。話すことはたくさんあった。いくつもの戦争、政界の動き、探検。男たちの所行とさまざまな出来事。共通の友人のこと、彼らの結婚と死。フェアファクスが聞いたがった五年間の事件である。

「そうして、スペインの艦隊はサンティアゴ湾で閉じ込められたわけさ」とヴァン・ブラントが言っていたとき、若い女がそっと入ってきて、フェアファクスの隣に立った。女はフェアファクスをちらりと見て、困ったようにヴァン・ブラントに視線を向けた。

「タントラッチ酋長の娘だよ。王女様さ」と、フェアファクスが本心そのままに顔を赤らめ説明した。「俺をここに留まらせるための賄賂の一つさ。ソム、こちらは友だちのヴァン・ブラントさんだ」

ヴァン・ブラントは握手を求めて手を差し出したが、女は彼女の物腰全体に似つかわしい堅い佇まいのままだった。顔のしわ一本ゆるむことがない。目鼻立ちのひとつとして緊張を解かない。彼女は彼をじっと見つめた。その視線は突き刺すようであり、問いつめるようであり、何かを探しているよう

でもある。

「色んなことが分かってしまうらしいな」と、フェアファクスが笑う。「初めてあんたに会ったというのにな。いずれにせよだ、スペインの艦隊はサンティアゴ湾に閉じ込められたってわけか」

ソムは夫の隣に腰を下ろした。ブロンズ像のように不動で、ただ目だけが光り、ずっと何かを探して男たちの顔を視線で追っている。エイヴェリー・ヴァン・ブラントは話を続けながら、無言の視線に居心地が悪くなっていった。海戦の再現がもっとも視覚的となりドラマチックになったところで、急に自分を焦がす黒い目の視線に気がついた。それで海戦ドラマは中断となり混乱してしまった。もう一度解説を始めるのは大変だ。フェアファクスは膝を抱え込んだ格好で座り、パイプを手に話に夢中になっていた。だから話の進みがおかしくなると、ブラントに先を急がせた。自分が忘れていたと思っていた世界をふたたび思い描いていたのである。

一時間が経ち、二時間が過ぎた。フェアファクスが残念そうに立ち上がる。「クロンイエ(訳注7)は、追いつめられちゃったわけか。まあ、その話はもういい。今からタントラッチに会いに行くから、待っててくれ。酋長もお前に会いたがっているだろう。朝食前にお前が拜謁できるようにセティングするよ。いいだろ？」

松の木を抜けて彼は出ていった。ヴァン・ブラントは、ソムの優しい瞳を覗き込んでいた。五年間か。でも、この娘はまだ二十歳はたちにもなってないじゃないか。すごい美人だ。エスキモーなんだから、鼻が低くたって当たり前だろう。ところが、見てみろ、鼻は横に広がってもいなし低くもない。わし鼻の形だ。白人の上流貴族の女と同じように、鼻の穴のかたちも絶妙だ。が、エイヴェリー・ヴァン・ブラントよ、こいつにインディアンの血が入っているのは間違いないぞ。エイヴェリー・ヴァン・ブラントよ、心配するな。別に俺を取って喰おうというのでもないのだから。ただの女さ。そしてそれほど見栄えの悪い女でもない。原住民というより東洋系だ。目は大きく、かな

り離れている。わずかばかりのモンゴル系的な意地悪の雰囲気がある。ソムよ、お前は異形の人間だ。このエスキモーの連中のなかでは、お前は場違いな人間だ。たとえお前の父親がエスキモーなのだとしても。母親の出身はどこなのだろう？ あるいは祖母は？ そして、かわいいソムよ、お前は美人だ。血管にアラスカの溶岩を流す美人、凍てつく極北に生きる美。それがお前だ。だから、お願いだ、そんな風に見えないでくれ。

ブラントは笑い、立ち上がった。彼女にじっと見つめられて落ち着かなかつたのだ。犬が食料袋をあさっている。フェアファクスが戻ったときに備えて、犬を追いはらって袋を安全なところに置いておこう。しかし、ソムが手で引き留め、まっすぐに見つめながら立ち上がった。

「アナタ？」と、彼女が北極圏でつかわれる言葉で訊いた。グリーンランドからアラスカ最北端のパロー岬までほとんど変わらずつかわれる言葉で、彼女は訊いてきた。

「アナタ？」

すぐに浮かんだ彼女の表情は、この単語一語が表す全ての意味に答えを求めている。ブラントの存在理由、この場所にやってきた理由、彼女の夫との関係。これら全てへの答えである。

「オニイサン」と彼は同じ現地の言葉で答えた。南のほうを全体を指しながら。「キョウダイだ、オマエの夫と私」

彼女が首を横に振る。「アナタ、ココにいるヨクナイ」

「一晩寝たら、出ていくよ」

「ワタシのヒトは？」と、声を振るわせ必死になって訊いてくる。

ヴァン・ブラントは肩をすくめた。ある秘められた罪、個人的以上である罪の意識に彼はとらわれ、フェアファクスへの怒りも覚えた。若い野蛮な娘を見ていると、顔が紅潮し、熱くなるのが感じられた。ただの女じゃないか、それだけのことさ、ただの女。昔ながらの悲しい話のくり返しだ。聖書のイヴと同じく古く、新たな愛の輝きと同じくらいに若いお話。

「ワタシのヒト！　ワタシのヒト！　ワタシのヒト！」すごい勢いで何度も何度も彼女はくり返していた。顔は情念で黒くなり、《永遠の女》、《同志の女》（メイト・ウーマン）の激しい優しさが瞳に宿り、彼を見つめていた。

「ソム」と、重々しく英語で彼は言った。「君は北の森で生まれた。そして魚を喰い肉を喰い、冷氣と飢えと闘ってきた。シンプルに素朴に生きてきた。しかし、そんなにシンプルでない事もたくさんあるんだ。君が知らない、理解することもできない物事がある。あちらの世界の肉のシチューが食べたいとか、白人の女の顔が見たいとか、そんな気持ちが、お前には理解できない。そう、女の顔は白いんだよ、ソム、高貴に白いんだ。お前はこの男の女だった、お前がお前のすべてそのものだった。だが、お前のすべてというのは、とても小さく、とてもシンプルだ。小さすぎて、シンプルすぎる。そのうえ、あいつは別の世界の男だ。あいつをお前は知らない、あいつをお前が知ることは、絶対に無理だ。それが運命なのさ。腕の中にあいつを抱きしめることはできたかもしれないが、あいつの心は抱きしめられなかった。曖昧に移ろいゆく季節を知る男、野蛮な目標を夢見る男の心を理解することはできなかった。夢、あるいは夢のかげら、お前にとって彼はそんな存在だった。実体を捕らえようとして、お前が捕らえたのは影だった。男に自らを捧げたが、床をともしたのは男の影だったのだ。昔から、神々が公正とみなした白人の娘たち、男が育てた娘たちも同じようにしてきた。そしてだ、ソムよ、ソム、これから先の日々において夜の番をするジョン・フェアファクスに、私はなりたくはないのだ。夜、彼が目覚ますとき目の当りにするのが、太陽に愛でられた白人女性の金髪ではなく、極北の森に見捨てられたエスキモー女の黒髪であるというのは許せんだ」

彼女には理解不能な言葉だった。それでもソムはじっと耳を澄まして聞いていた。まるで自分の命が彼の言葉にかかっているかのように。が、フェアファクスという夫の名前が聞こえると、彼女はエスキモー語で叫んだ。

「ソウ、ソウ、ソウナノ。フェアファクス。ワタシの夫」

「かわいそうに。どうやってあいつがお前の夫になどなれると言うのか」

しかし、彼女にはブラントの英語が分からなかったから、自分が軽く扱われているのだと思った。無言の何も感じないかのような《同志の女》(メイト・ウーマン)の怒りの炎が顔全体に燃え広がった。ブラントには、彼女が屈み込んでいるように見えた。ちょうどパンサーが飛びかかる前にそうするように。

自分にむかって小さく罵りの声をあげたあと、彼女の表情から怒りの炎が消えてゆくのをブラントは見ていた。そして、優しい訴える女の輝き、力に訴えるのを諦め女らしくその弱さに身を包み、願いを申し出る女の輝きが現れた。

「アノヒト、ワタシのオトコ」とゆっくりと言う。「ホカにオトコ、シラナイ。ホカにオトコ、コレカラもシラナイ。アノヒト、ワタシからハナレテいけない」

「奴が君のもとを離れるなんて誰が言ったんだ」と、きつい口調でブラントは問いただした。半分追いつめられていたし、半分はどうしてよいか分からなかったからだ。

「アノヒトに、行くのはダメという伝えるの、アナタの役目」と彼女はゆっくりと答えた。嗚咽にちかい泣き声になっている。

ヴァン・ブラントは焚き火の燃えかすを蹴りとばし、座り込んだ。

「アナタの役目。アノヒト、ワタシのオトコ。どれだけオンナいようと、アノヒト、ワタシのオトコ。アナタ、大きい。アナタ、強い。見て、ワタシ、弱い。ワタシ、アナタの前で跪く。ワタシのためにしてくれるの、アナタの役目。アナタの役目」

「立てよ」。ブラントは彼女を強引に立ち上がらせ、自分も立った。「君は女だ。だから土の汚れは似合わない。男の前で跪くのも間違いだ」

「アノヒト、ワタシのオトコ」

「だとしたら、イエス様は男たちをみな許すよ」ヴァン・ブラントが熱く

なって叫んだ。

「アノヒト、ワタシのオトコ」。なおも彼女は単調に、嘆願するかのようにくり返していた。

「あいつは、俺の弟だ」とブランドは答える。

「ワタシの父、タントラッチ酋長。五つの村、オサメテル。アナタの気に入るオンナさがしてくれる、五つの村、さがしてくれる。ヤクソクする。そして、アンシンして暮らす」

「一晩寝たら、出発するんだ」

「アノヒトは？」

「あいつが来たぞ、ほら」

暗いアメリカツガの森から、フェアファクスの鼻歌まじりの明るい声が届いてきた。

まるで霧が日の光を打ち消すかのように、ソムの表情から光が消えた。

「アノヒトの仲間のウタ」とソムは言う。「アノヒトの仲間のコトバ」

しなやかな若い獣の身のこなしで向きを変えると、彼女は森に向かった。

「段取りはつけたぞ」と、やって来たフェアファクスが言う。「酋長は朝食のあと会ってくださるそうだ」

「あの件は話したのか？」とヴァン・ブランド。

「いや、出発の準備が整うまで話すつもりはない」

ブランドが眠る部下たちを、思い詰めたように、しかし親密感をもって眺めた。

「この村から早く百リーグは離れたいもんだな」

ソムは、父親のテントの革製の布をたくし上げた。二人の男が酋長のそばに座っていた。すぐに好奇心に駆られ、三人がソムを見る。けれど、彼女が入り静かに腰を下ろしても、彼女は何も言わなかった。表情も何も伝えてはこなかった。タントラッチは、膝の上にあった槍の柄がドラムであるかのよ

うに、こぶしで叩き、テントの穴を通して差し込んでくる光の線、暗いテント内に日の光がつくる線を眺めた。酋長の右側で肩のところから顔を覗かせているのは、まじない師のチュグンガッテだ。どちらも高齢でそれゆえの疲れが目に見えている。しかし二人の反対側に座っていたキーンは若く、部族の人気者だ。彼の仕草は俊敏で警戒感に溢れている。黒い目がまわりの顔をたえず見つめ、観察し抵抗していた。

沈黙がこの場を覆っていた。ときどきキャンプの音突き刺してきた。まるで声の影のごとく、遠くからわずかな響きとして、かん高いもみ合う少年たちの声が届いてきた。犬が一匹、入り口から顔をつき入れ、狼のようにしばらくのあいだ彼らを見つめた。^{まばた}瞬きしながら。象牙のような白い牙からは、よだれが垂れている。やがて試してみるかのようにうなり声をあげたが、人間たちがまったく動かないものだから、頭を低くして後ろに下がっていった。タントラッチが関心もなさそうに娘を見る。

「お前の夫は、どうかな、うまくやっているのか？」

「聴いたことのない歌を歌ってる」。ソムが答えた。「見たことのない表情をしてる」

「だから？ 何か言ったのか？」

「いいえ、新しい表情をしていて、新しい光が目にあって、新しい人と一緒に焚き火の横に座り、ずっとずっと話をしている。話に終わりが無い」

チュグンガッテが酋長の耳元で何かを囁いた。そして、キーンが座った姿勢から身を乗り出した格好になる。

「遠くから男を呼ぶ何かがある」と、彼女は話を続けた。「そしてあの人はじっくりその声を聴くつもりらしい。そして答えるつもりらしい。あの人の言葉で歌を歌うことによって」

ふたたびチュグンガッテが何か囁き、キーンが前に乗り出す。話を続けよと父が頷くまで、ソムは話の続きをしないでいた。

「お、お父さん、野生ガンとハクチョウ、リングド鴨はここ、低地で生ま

れる。しかし、霜がくる前にどこか知らない土地へと旅立つ。これを知ってほしい。同じように知ってほしいのは、これら鳥たちは太陽が戻るころ、水が流れるころ、この地へ帰ってくるということ。生まれたところへ彼らは帰ってくる。新たな命が育まれるようにと、帰ってくる。大地が彼らに呼びかけ、彼らは帰ってくる。今、別の土地があり、その土地はワタシの夫に呼びかけている。彼の生まれた土地が呼びかけている。ワタシの人は、呼びかけに答えるつもりらしい。でも、彼はワタシの人。どれだけのオンナがいようと、彼はワタシの夫」

「良いのか？ タントラッチよ、これで良いのか」とチュグンガッテが、声を怒らせて訊いた。

「そうさ、良いのさ」とキーンが堂々と言い放つ。「土地が子どもに呼びかける、戻ってこいと呼びかける。野生ガンやハクチョウ、リングド鴨が呼びかけられるように、この異国人も呼ばれている。しばらく我らの土地にいたこの男も、今やここを去らなければならない。それは種族の呼び声だ。ガンはガンと睦む。ハクチョウはリングド鴨とは睦まない。ハクチョウがリングド鴨と睦むのは良くない。同じように、異国人が我が村の女と睦むのは良くない。それゆえ、男は去るべきだ、自分の土地の仲間たちのもとへ帰るべきなのだ」

「彼はワタシの夫」とソムが答えた。「そして彼は偉大な男」

「そのとおり。あいつはすごい男だ」と、チュグンガッテがいくらか若さの活力を取り戻したかのように顔を上げて言った。「あいつはすごい男で、お前の腕に力をあずけた。タントラッチよ、お前に力を授け、この地でお前の名が恐れられるようにした。恐れられ敬われるようにしてくれた。あいつは賢い。だから、あいつの知恵は使いものになった。多くのことで、あいつの厄介になってきた。戦争の戦い方、村の守り方、森への逃げ方、会議のやり方、交渉や固い約束で敵を騙すやり方、獲物の仕留め方、毘の作り方、食料の保存の仕方、病気の治し方、旅の途中や戦闘のときに負った傷の治療法。

このストレンジャー・マンがやってきてお前の介抱をしなかったら、今ごろ、酋長は足を引きずる老人になっていたろう。また、いつだって、奇妙な問題にぶつかったときには、我々は彼のもとを訪れた。すると彼の知恵が物事をすっきりさせてくれた。いつでも問題をきれいに整理してくれた。これからも問題が起ころう。彼の知恵が必要なこともあろう。あいつを行かせるわけにはいかない。あいつを帰らせるのは良くない」

タントラッチは、槍の柄をドラムのように叩き続けた。そして聞いているそぶりさえ見せない。ソムは父の顔をじっと見ていたが無駄だった。年齢よかいの重みが戻ってきたように、チュングガッテも項垂れ縮んでゆくかのようにだった。

「俺の獲物は俺が仕留める」と言いながら、キーンが勇猛果敢な戦士らしく胸を叩いた。「自分の獲物は自分で仕留める。自分で仕留めたとき、生きているのが嬉しくなる。でかいヘラジカを狙って雪原を這い回っているとき、嬉しくなる。そして力の限りに弓を引いて、矢が心臓めがけて一直線に突き刺さるとき、俺は嬉しい。自分で仕留めた獲物の肉は、誰かほかの奴の獲物とは比べものにならない味がする。生きているのが楽しいし、知恵と力が嬉しい。ものをする人間であること、自分のことが自分でできる人間であることが嬉しい。それ以外に生きる目的などあるのだろうか。自分の中に喜びが見つけられないなら、どうして生きていかなければいけないのか。嬉しく楽しいからこそ、出て行って狩をして漁をする。出て行って狩をして漁をするから、知恵と力がつく。テントの中にもって焚き火にあたっている奴には、知恵も力もつかない。俺の獲物を口にしてもおいしくないだろうし、生きることが喜びにはならないだろう。生きていないからだ。だから、この異国人が立ち去るのが良いと私は思う。彼の知恵では、我々は知恵を獲得しない。彼に知恵があると、我々が知恵をつける必要がなくなってしまう。必要になると、彼に知恵を借りにいく。奴の仕留めた獲物を食す。でも、獲物はうまくない。奴の力で得をするかもしれないが、そこには喜びがない。俺たちの

ために生きてもらったら、我々は生きてないことになる。ぶくぶく太り、女のように働くのが嫌になる。自分で自分のことをすること、そのやり方を忘れてしまう。タントラッチよ、奴を去らせろ。俺たちが男になるために。俺はキーンだ、男だ。だから、自分の獲物は自分で仕留める」

タントラッチはキーンを見つめた。その眼差しには、永遠の虚無が宿っているかのようだった。キーンは酋長の決断を待ちわびた。しかし、酋長の唇は動かない。老いた酋長は、娘のほうを向いた。

「一度あたえられたものを、取り上げることはできない」と、彼女は一気に呵成に言い切った。「この異国人、ワタシの夫が村にやって来たとき、ワタシはまだ小娘だった。男を知らず、男のやり方も知らず、ワタシの心は小娘の遊びにばかり向いていた。そのとき、ほかならぬお父さんがワタシを呼びつけ、ワタシを異国人の腕に押しつけた。ほかならぬタントラッチ、お父さんがワタシを男に与えた。そして、同じようにお父さんが男をワタシにくれた。だから、彼はワタシの男。男はワタシの腕の中で眠るから、ワタシの腕から彼を誰も奪えないはず」

チュグンガッテが立ち上がる。「キーンよ、若いがゆえにお前の言葉は出た。齢を重ねた我々はだ、タントラッチよ、物事を良く理解しておる。我々も、女の目を覗き込み奇妙な欲望で血がたぎるのを経験したことがある。しかし、年月が熱を冷ましてくれた。寄り合いがもたらす知恵も、冷たい頭と手からくる巧みなやり方も知った。熱い心は熱くなりすぎ、性急さを求めがちなこと知った。キーンがソムを気に入っていたのは、我々の知るところだった。ソムが幼いころ、そもそもソムはキーンの嫁になることになっていた。ところが新しい時代になって、ストレンジャー・マンがやって来た。知恵と平和を求めた我々は、ソムをキーンに嫁がせるのを、止めることにした。こうして約束が破られた。これも全て我々は知っている」

年老いたまじない師はここでいったん話を止め、キーンをまっすぐに見つめた。

「そして知るがよい、約束が破られることを進言したのは、このチュグンガッテだったということをして」

「ほかの女を床に入れたことはないんだ」とキーンが口をはさんだ。「焚き火は自分で熾し、食事も自分でつくり、孤独の中で歯を食いしばってやってきた」

チュグンガッテは、まだ話は済んでいないという身振りをした。「私は老人で、理解力をもって話しておる。強くあろうとして力を求めるのは良いことだ。だが、良き結果を求めて力を諦めるほうがもっと良い。昔、タントラッチよ、私はそなたと肩を並べて座り、寄り合いでは皆が私の意見に耳を傾けた。重大時には、私の忠告が聞き入れられた。強く力があったからだ。タントラッチの次に偉い男だった。そうしてストレンジャー・マンがやって来た。あいつは巧妙で知恵があり偉大だった。わしより知恵があり偉大だった。私の知恵より彼の知恵のほうが、より多くの利益を生み出すことは、はっきりしていた。それで、タントラッチよ、お主に私は意見を言い、お主は私の意見を聞いた。ストレンジャー・マンには、力と地位とお主の娘ソムが与えられることになった。新しい時代に新しい掟のもと、我が部族は栄えた。これから先もストレンジャー・マンがいれば、繁栄は続く。タントラッチよ、我々二人は老人だ、そして、これは心の問題ではなく頭の問題だ。私の言葉を聞くが良い、タントラッチよ、私の言葉を聞け。ストレンジャー・マンは残るのだ」

長い沈黙があった。神の巨大な確信をもって、老いた酋長は考え込んでいた。チュグンガッテが偉大な老齢の衣に包まれているように見えた。キーンはソムを憧れの眼差しで見つめた。彼女のほうは、それにまったく気づかず、視線を父親の顔に釘付けにしていた。狼に似た犬がまた入り口の布を脇に寄せ、沈黙に対し勇気を奮い起こして腹這いのまま入り込んできた。ソムの落ち着かない手の臭いをかぎ、チュグンガッテにむかって好戦的に耳を立て、タントラッチの前に腰を下ろした。槍が音を立てて地面に転がった。驚いた

ように犬は弱々しい鳴き声をあげ、宙の何かに噛みつこうとしながら横に飛んだ。二度目に飛び跳ねたときには、テントの入り口から出ていった。

タントラッチは、各人の顔を順番に眺めていった。慎重に時間をかけて眺め、考え込んでいた。そうして顔を上げ、荒々しくも丁寧なお辞儀をすると、落ち着いた平板な調子で決断を下した。「異国人は残る。狩人たちを集めよ。戦士を連れてこいとこの命令を隣村に伝えるよう人を出せ。新しい異国人には、わしは会わん。チュンググアッテよ、お前が話をせよ。奴には、争うことなく出てゆくつもりなら、すぐにこの地を離れよ、と伝えよ。もし戦闘になったら、最後の一人まで殺して殺して殺しまくれ。しかし、あの男、我々の男だけは傷つけてはいかん。これを皆に伝えよ。わしの娘が嫁いだ男のことだ。これで良からう」

チュンググアッテは立ち上がり、よろよろと出ていった。ソムもそのあとに続いた。が、キーンが入り口で身を屈めたとき、タントラッチの声が彼を引き留めた。

「キーン、わしの決断をきちんと守ることだ。あの男はここに残る。傷つけてはいかん」

フェアファクスから戦術の指導を受けていたから、部族の者たちは、関の声をあげて大胆にまっすぐ進んでくるような戦い方はしなかった。戦士には抑制と自己管理が行き渡っていた。音を立てずに前進することに彼らは満足した。もの陰からもの陰へと匍匐前進してきた。川岸の少し開けた場所に一部分守られながら、クリー族の連中と荷運び人夫たちは座っていた。視界が悪く、不明瞭な音が何とか届く程度だ。それでも、森を抜ける生命の緊張感を感じることはできた。曖昧でこれだと断定しがたいが、迫ってくる敵の動きを感じてはいた。

「奴らだな」とフェアファクスがもらす。「奴らは火薬の威力を経験したことはないけれど、それでも火薬が何なのかは俺が教えてしまった」

エイヴェリー・ヴァン・ブランドは笑い、パイプの灰を捨てた。そして慎重にパイプを小袋にしまった。腰の鞘に入っていたハンティング・ナイフをいつでも取り出せるようにしている。

「待ってるよ」とブランドは言う。「攻撃隊の先頭をやっつければ、戦意喪失状態にもってゆける」

「俺の教えたことが身につけていけば、あいつらはバラバラになって攻めてくる」

「ならば、そうさせておけばいい。弾倉式ライフルというのは、弾を浴びせるように作られてるんだから、平気さ。いずれにせよ、最初の血が流れることになる。タバコをもっと寄こしな、ルーン」

ルーンはクリー族の男だ。ルーンは、敵兵の肩を見つけると、弾丸を撃ち込むことで、その肩の持ち主に自分の発見を教えてやった。

「何とか一列に攻め込ませよう、奴らを誘うことができればいいのだが」とフェアファクスがこぼす。「奴らを何とか一列に攻めさせられれば……」

ヴァン・ブランドが、遠くの木陰から敵が覗き込むのを見つける。すぐさま弾を放ち男を地面にたたき落としてやった。死の呻きをもらしながら敵もがいていた。マイケルが三人目を仕留め、フェアファクスと残りの連中も戦闘に加わり、目につく限りの敵に発砲した。茂みに動きがあればそこにも弾を撃ち込んでやった。さえぎるものもない窪地を進もうとしていた敵兵五人は、こうして大地に顔をうずめたまま動かなくなる。やはり物陰の少ない左側の場所でも、十人以上の原住民が撃たれ倒れた。しかし部族全体は、無言の落ち着きでこの攻撃に耐えていた。そして、注意深く前進し続けてくる。急ぐこともなく、遅れることもなく。

十分後、彼らはすぐ近くまで来ていた。全ての動きが止まり、前進の歩も止まり、不気味な沈黙が辺りを覆った。恐かった。森や下ばえの緑と金色が、わずかな朝風に、小刻みに揺れ震えているのが見えるだけだった。弱々しい白い朝日が長い影と幾本もの光の筋で、大地に縞模様をつくっていた。傷を

負った男の一人が頭をもたげ、苦痛に顔をゆがめながら窪地から這いずり出す。マイケルがライフルの銃口で彼を追う。が、撃つことはなかった。と、そのとき右の方から左の方まで拡がる見えない線にそって口笛が響いた。そして、弓矢の束が弧を描いて飛んできた。

「準備をしておけ」とヴァン・ブランドが命令する。声には今までなかった金属的な響きがある。「さあ、来たぞ」

敵の戦士たちが覆いを同時に振り払った。森が膨らみ命を帯びた。大きな叫び声があがり、ライフルの銃声が抵抗の声で応える。部族の者たちには、宙に飛び上がったとき、死がなんであるのか知った者もあった。しかし、彼らが倒れると、彼らの兄弟たちが関の声とともに波のように押し寄せてきた。押し止めようのない大波だった。髪をなびかせ腕を振り回し、じゃまな丸太を飛び越え、樹の幹の横を閃光を放ちながら、彼らは迫ってきた。その先頭に、ソムがいた。フェアファクスは照準を合わせ、危うく引き金を引くところだった。それがソムだと気づいて、撃つのを止めたのだ。

「あれは女だ。撃つな！」フェアファクスは叫んでいた。「女は武器も持っていない」

クリー族の男たちも、マイケルも、仲間の人夫もヴァン・ブランドさえ、彼の言葉を聞いてはいなかった。ヴァン・ブランドは銃を撃ち続けていた。しかし、ソムがこちらに向かってまっすぐに進んでくる。獣の皮で身を覆った狩人が一人横から出てきて、ソムの前を走っていたから、彼女は狩人の後ろを追いかける格好になっていた。フェアファクスは、ソムの左右に展開する原住民たちを銃で撃ち、狩人の大男と対面しようと銃を向けた。男もそれに気づいたようで、横方向に急旋回したかと思うと、槍でマイケルを突き刺した。ソムはフェアファクスの首に腕を半分回し、攻撃してくる戦士たちから、言葉と身振りで彼を守っていた。二十人ほどの部族の戦士たちが脇を抜けていった。一瞬、フェアファクスは彼女を見つめた。そこにあったのは褐色の美だった。彼は興奮し熱狂し、未知の深みにまで到達し、見たこともな

い光景を幻視していた。夢を見ているのだった。永遠に終わらない夢だった。古い世界の哲学や新しい世界の道徳の断片。これらが脳裏をよぎる。驚異的に具体的な事象と畏れ多いほどに不調和なものたちが、目の前に広がった。狩猟の場面、暗い森の広がり、沈黙する広大な雪原、ダンスパーティ会場の照明の明かり、大きな美術館と講義堂、鈍く光る試験管の輝き、本のつまった本棚の長い列、機械が立てる規則的な低音、交通機関の喧噪、忘れてしまった歌の一節、美しい女と昔からの友だちの顔、屹立する山脈のあいだを流れる寂しげな川、月に照らされ沈黙する平原、深い峡谷、干し草の臭い……。

ライフルの弾を眉間に撃ち込まれた狩人が、瀕死の状態ではよよろと前に倒れ込んできた。走っていた勢いで地面を滑ってくる。ここで、フェアファクスは我に帰る。フェアファクスの仲間たち、まだ生き残っていた仲間たちは、ずっと後ろの林のところまで後退し追いつめられていた。彼らを取り囲む部族の戦士たちの「ヒア！ ヒア！」という猙獰な声が聞こえる。動物の骨や象牙でできた武器で、彼らは仲間たちを切り裂いていた。襲われた男たちの悲鳴が、殴られたような衝撃をフェアファクスに与えた。戦いが終わったのを、フェアファクスは知っていた。大義が敗北したのだ。それでも、彼の人種の伝統とアングロ・サクソンへの忠誠心から、彼は戦い続けなければならなかった。少なくとも仲間たちと一緒に死ぬるように。

「ワタシのオコト、ワタシのオット」とソムが大声をあげる。「アナタ、助かる」

フェアファクスはもがき続ける。しかし、しがみつくソムの重さゆえに、足取りはひどく重い。

「ヒツヨウナイ。トモダチ、シンデル。生きるのイイコト」

ソムが首にしがみつuki、手足を絡ませてきた。フェアファクスはよろけ転んでしまった。力をこめて立ち上がろうとするがふらつき、また転んでしまう。尻餅をつき後ろ側に倒れ込んでしまった。頭を飛び出していた樹の根にぶつけ半ば意識を失い、戦おうにもほとんど力が出ない。倒れ込んだところ

で、ソムの耳には、鳥の羽のついた矢が飛んでくるヒュッという音が聞こえた。彼女は夫の身に自分を重ねて守る。腕は彼をしっかりと掴んで放さない。顔と唇は、首に押しつけられていた。

二十フィートほど離れたところで、藪の中からキーンが立ち上がったのは、このときのことだった。注意深く、キーンは辺りを見渡した。戦いは終わっていた。最後の一人の呻き声も消えかかっていた。見ている者は一人もいない。彼は矢を弓に掛けると、その男と女を見つめた。女の胸と腕のあいだに、男の脇腹の肉が見える。白い肉だ。キーンは弓を構え、矢尻が手前にくるまで引いた。二度、彼は静かにこれをくり返し、手違いが無いことを確認した。そうして、さかとげの付いた矢尻に、その白い肉体を扶^{たす}らせた。褐色の腕、褐色の胸に抱かれて白く輝く肉体を、矢が貫いた。

《訳注》

- (1) ロバート・クライヴ (Robert Clive)。1725-74。インドの植民地化に大きく寄与した英国の将軍。
- (2) ウォレン・ヘイスティングズ (Warren Hastings)。1732-1818。初代インド総督。
- (3) サー・フランシス・ドレイク (Sir Francis Drake)。c. 1543-96。英国で最初に世界周航をなした英国の提督。
- (4) サー・ウォルター・ローリー (Sir Walter Raleigh)。1554?-1618。北米大陸への植民を企てた英国の探検家。
- (5) ヘンギストとホルサ (Hengest and Horsa)。d. 488 and 455。449年ごろ、ブリテン島に侵攻したジュート族の首長兄弟。
- (6) ゼブロン・モンゴメリー・パイク (Zebulon Montgomery Pike)。1779-1813。アメリカの探検家。ミシシッピ川源流地域、アーカンソー川、レッド川源流地域を探検。
- (7) ピーター・アーノルドゥス・クロンイェ (Pieter Arnoldus Cronje)。c. 1835-1911。南アフリカのブール人指導者、ブール戦争 (1899-1902) の司令官。

【訳者付記】

ジャック・ロンドン (1876-1916) の第三短編集『氷点下の子どもたち』(*Children of the Frost*, 1902) の短編作品を訳出してゆく。

「極北の森」は短編集の冒頭に置かれた作品である。翻訳テキストとしては、短編集である *The Complete Short Stories of Jack London*, vol. 1, 656-671, eds. by Labor, Earl et al. (Stanford: Stanford UP, 1993) を用いた。

短編集は、北アメリカ大陸原住民 (エスキモー、インディアン、イヌイットなどと正確な区別なく呼ばれる) の視点から、1896年から1898年、クロンダイク・フィーバーに冒されたアラスカ州で行われ、そしてロンドンが観察した、白人アングロ・サクソン族による原住民と「自然」の搾取を主題とした短編群をまとめた作品である。搾取を主題にしているといっても、作家がアングロ・サクソン至上主義から自由であるということではない。そこからの離脱——キャリア全体を見渡すとき、半ば成功し半ば失敗した、と言ってよい——を見極めようというのも、この連作になる訳出・論考における我々の狙いの一つである。この短編集の冒頭作では、対象が原住民であれ女性であれ、差別的視点はあ

各短編作品とは以下のとおりであり、(脱稿年月日/掲載雑誌, 日時/語数/ロンドンの受領額/1語あたりの単価)「翻訳タイトル」のフォーマットで情報を付記する。

“In the Forest of the North” (1901年11月2日/*Pearson's Magazine*, 14.

Sept. 1902/6,800 words/\$150/2.2 cents)「極北の森」

“The Law of Life” (1900年4月18日/*McClure's*, 16. Mar. 1901/2,700 words/\$55/2.0 cents)「生の掟」

“Nam-Bok, the Unveracious” (1901年8月3日/*Ainslee's Magazine*, 10. Aug. 1902/5,500 words/\$100/1.8 cents)「嘘つきナム・ボック」

- “The Master of Mystery” (1901年9月25日/*Out West*, 17. Sept. 1902/
4,100 words/\$15/0.4 cents) 「魔法のマスター」
- “The Sunlanders” (1901年9月9日/掲載誌なし/8,000 words/なし/
なし) 「サンランダーズ」
- “The Sickness of Lone Chief” (1902年4月16日/*Out West*, 17. Oct.
1902/3,700 words/\$10/0.3 cents) 「孤独な酋長の病」
- “Keesh, the Son of Keesh” (1901年7月9日/*Holiday Magazine for Chil-
dren*, 1. Jan. 1904/3,300 words/\$27.50/0.8 cents) 「キーシュ、キー
シュの息子」
- “The Death of Ligoun” (1902年3月4日/掲載誌なし/受領額なし/単
価なし) 「リゴウンの死」
- “Li Wan, the Fair” (1901年8月23日/*Atlantic Monthly*, 90. Aug. 1902/
6,500 words/\$100/1.5 cents) 「白人のリ・ウォン」
- “The League of the Old Men” (1902年5月2日/*Brandur*, 1. Oct. 1902/
6,400 words/\$160/2.5 cents) 「老人同盟」

このような形で情報をまとめるのは、ジャック・ロンドンの主題（人種観）ばかりでなく、世紀転換期の文学マーケットにおいて、異人種をその表象において白人読者に提供するとはどういうことだったのか（ちょうどスラム探訪記がジャンルとして成立していたのと同型だろう）、市場において作品を売ることがこの時代にどのようなものであったのか、ロンドンはどのように作家としての自己形成を成し遂げたのかを浮き彫りにする目論見ゆえである。尚、ロンドンがいくらかで作品を雑誌に売却できたのかという意味である「ロンドンの受領額」では、アメリカの雑誌の場合のみを記した。イギリスでも売り込みに成功した場合がある。

これら付記のための情報ソースとしては、James Williams, “Jack London’s Works by Date of Composition,” in *American Literary Realism* vol.

23, 2, winter 1991, pp. 64-86 (http://london.sonoma.edu/Essays/comp_date.html で閲覧可能) 及び “Publication History” in Jack London, *The Complete Short Stories of Jack London*, vol. 3, pp. 2497-45 を用いている。

複雑なリストになっているので、いくらかかみ砕いてみたい。

執筆順に作品群を並べ直し、短編集で最終的に採用された順番と対照してみる。

【執筆順】

【短編集での配置】

“The Law of Life”	“In the Forest of the North”
“Keesh, the Son of Keesh”	“The Law of Life”
“Nam-Bok, the Unveracious”	“Nam-Bok, the Unveracious”
“Li Wan, the Fair”	“The Master of Mystery”
“The Sunlanders”	“The Sunlanders”
“The Master of Mystery”	“The Sickness of Lone Chief”
“In the Forest of the North”	“Keesh, the Son of Keesh”
“The Death of Ligoun”	“The Death of Ligoun”
“The Sickness of Lone Chief”	“Li Wan, the Fair”
“The League of the Old Men”	“The League of the Old Men”

これらの作品で、やはり重要と思えるのは、古典的評価のまま、「生の掟」「白人のリ・ウォン」「老人同盟」であろう。とりわけ、ロンドンが「生命の掟」を最初に執筆しこの作品を軸に短編集を編めるだけの作品群を書けると考えた点に注目に値する。やがて「クロンダイクだけの作家で終わりたいくない」と明かすロンドンだが、『野性の呼び声』（1903）の前の時期、彼はまさに「クロンダイクの作家」であった。この短編では人種偏見はないと言ってよい。また人種的他者としての扱いも重くはない。人類、あるいはヒ

トとしての真理、生命体としての普遍的宿命が語られている。また、当時の文壇最高級誌である『アトランティック・マンスリー』誌に採用された「白人のり・ウォン」（「自然」=女性の公式に疑問符をつけながらも、人種間の葛藤とアイデンティティのありかを模索する佳作）が比較的初期に書かれ、そしてマクミラン社との短編集出版の契約が事実上きまった段階で、作品集の「締め」として「老人同盟」が書かれている。暴力革命を志向する社会主義思想を思わせずにはいないこの短編が、作家自らの立場表明の意図で執筆され、それをメタフォリカルに発表していると想像してよい。人種の問題が階級の問題へとつながっている。

今回訳出した「極北の森」は、短編集の最初に置かれている。その位置に持ってこられたこの作品が、短編集の中でどのように機能しているのだろうか。ここでは「研究ノート」として作品の特徴、その概略を記すにとどめる。上に挙げた三作品のような重厚さはないかもしれないが、小説技巧として、また転換期の文化イディオムの表出事例として、この作品は他の作品より複雑であるように思える。

- (1) 文明間の衝突がある。白人対エスキモー。
- (2) 文化文明への洞察が深いとは言い難いが、原住民=自然=女性という、現代においてもクリシェとして機能し我々の意識を規定しているかもしれない公式が下敷きになっている。
- (3) ロンドンが好んで採用した「科学者」が一方の主人公として配されている（最晩年の「赤い球体」〔1918〕にまで及ぶ長い偏愛ぶりである）。
- (4) 原始・未開の生活と世界を扱いながらも、読者たちがそこに寄せる期待に応えようとしている。これらを題材とする動機が垣間見られるということである。つまり、米西戦争やブル戦争、そして文明への不満（「文明の生きにくさ」へのフェアファクスの不満を見よ）が描かれている。

- る。白人都市生活者の心理と不安が、ナラティブの動機となっている。
- (5) 暴力に満ちあふれアクション描写が後半、横溢するが、けっしてロンドンが得意とするこはなかった心理描写、とりわけ男の逡巡を描こうとロンドンに苦勞している。
- (6) 『エルシノア号での反乱』(*The Mutiny of the Elsinore*, 1914) やメキシコ革命を扱ったルポルタージュ記事「法を与える者たち」(“The Lawgivers,” 1914) でもくり返される、世界探検家たちへの言及がある。彼らは単なる冒険家ではなく、明らかに帝国主義的侵略者たちである。おそらく、ロンドンの人種意識には変化しなかった部分があったようである。
- (7) 極限状況下の人間を描き、ほとんど獸的と言ってよさそうな金への欲望を動機として、超硬派というイメージで捉えられるクロンダイク作品だが、恋愛心理が実は背景として大きく作用している(エミリーへのフェアファクスの恋、フェアファクスへのソムの恋)。これを興味の対象とする白人読者(女性読者)への気遣いがある。
- (8) ビクトリア朝道徳的なジェンダー観がありながら(主に科学者ブランドの視点)、その道徳観に捕らわれないロンドン的な「強い女」(Mate-Woman)への憧れがある。二人目の妻チャーミアンへの愛ある呼称として有名な“Mate-Woman”であるが、本格的に彼女と出会う前から、作品内でこの言い方が使われていた。人生を作品として生きるとでも表現したくなる、ロンドンの「ダブル・ライフ」の要素が見られる。
- (9) ロンドンの意識は知りようがないが、転換期の「執筆の風景」(“the scene of writing” by Michael Freid)の圧力は顕著だ。これは「リ・ウォン」においても強烈である。「仕事のマネイジメントこそが仕事の本質であり、表象が表象されるものと同位置に並ぶことにより、政治経済的に近代文化が成立する。地図と地形の同一視において近代人の現実感が立ち現れる」(by Mark Seltzer)というポスト・モダンな視点へ

の、じつに自然主義的なサンプルを提供している。

我々のこの最終的な目論見は(8)(9)の点を点検することにあるのだが、まず、上の形で整理し確認しておく。

(おおや・たけし 理工学部准教授)